聖書日課『からし種』2024.12.22－12.29

12月 22日 （日） ヨエル 1章	**「この地に住む者よ、皆耳を傾けよ。あなたたちの時代に、また、先祖の時代にも／このようなことがあっただろうか」（２節）。**ヨエルが初めに描き出すのは圧倒的な速さで変化する世界情勢、思いも寄らない課題や危機に次々と向き合わされる私たちの姿。欲望か怒りか自分の思いに駆られ、突っ走る先がどうなるか、主の忠告に耳を傾ける時をもちたい。
23日 （月） ヨエル 2章	**「あなたたちの神、主に立ち帰れ。主は恵みに満ち、憐れみ深く／忍耐強く、慈しみに富み／くだした災いを悔いられるからだ」（１３節）。**「主は恵みに満ち…慈しみに富み」は、旧約聖書の中で何度も告白されるが、「くだした災いを悔いられる」と語るのはヨエル書独特。預言者が災いの中で「主の御心はどこに？」とひたすら祈り求めて得られた示しなのだろうか。
24日 （火） ヨエル 3章	**「主の日、大いなる恐るべき日が来る前に／太陽は闇に、月は血に変わる。しかし、主の御名を呼ぶ者は皆、救われる」（４～５節）。**「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました」（ヘブライ1章1～2節）。今宵、灯の中で静かに主の御名を呼ぼう。
25日 （水） ヨエル 4章	**「わたしは彼らが流した血の復讐をする。必ず復讐せずにはおかない。主はシオンに住まわれる」（２１節）。**クリスマスの朝、この凄まじい言葉で終わる箇所をいただく意味を考える。旧約時代のイスラエルにこのような復讐心を起こさせるほどの何があったのか。この憎しみを受け継ぐ人々の中に、神の御子が小さな裸の赤ん坊として送られたことを考える。

メール配信登録メール　senfkorn.obc@gmail.com　　大井バプテスト教会

聖書日課『からし種』2024.12.22－12.29

26日 （木） アモス 1章	**「戦いの日に鬨の声があがる／嵐の日に烈風が吹く中で。彼らの王は高官たちと共に／捕囚となって連れ去られると／主は言われる」（14－15節）。**旧約で語られる「諸国民への主の裁き」は、多くの国々が負わされてきた戦災の苦しみの記録に他ならない。捕囚となって連れ去られる王や高官の背後に倒れている肩書き無き人々を想わずにいられない。
27日 （金） アモス 2章	**「わたしはお前たちの中から預言者を／若者の中からナジル人を起こした。イスラエル（北王国）の人々よ、そうではないかと主は言われる」（11節）。**主は、南のユダ王国には代々の王や祭司を、北イスラエル王国には御言葉を語る預言者と、儀式的清さをもって主に仕える「ナジル人」を起こされた。私たちの中に主はどんな役割を起こされるだろうか。
28日 （土） アモス 3章	**「まことに、主なる神はその定められたことを／僕なる預言者に示さずには／何事もなされない」（7節）。**「打ち合わせもしないのに／二人の者が共に行くだろうか」に始まる3～6節を読むと、主が行われるすべてのことは私たちにも理解できるはずだと知らされる。ただ、「なぜ私に、なぜその人に」それが起こるのかは、ヨブも問い、十字架のイエスさまも叫ばれた。
29日 （日） アモス 4章	**「イスラエルよ／お前は自分の神と出会う備えをせよ」（12節）。**この4章には「しかし、お前たちはわたしに帰らなかった」という言葉が5回も繰り返されている。「立ち帰ってほしい」という願いが裏切られ続けても、なおイスラエルに語りかける神の心の内を想う。礼拝は、私たちが自分の願いを吐露するだけでなく、神の思いを受けていく時であることを覚えたい。

大井バプテスト教会